

オリーブ動物医療センターグループ

福留 幸一 先生

KOICHI FUKUTOME

これからのペット業界を変えられるのは あなたかもしれません



獣医師の役割は、診療だけなのだろうか

私はこれまで、小動物臨床の現場に身を置き、動物医療の質を高めることを一つの使命として歩んできました。診断技術を磨き、治療の選択肢を増やし、より高度で、より安全で、より飼い主に寄り添える医療を提供する。その積み重ねこそが、獣医師としての責任であり、社会に対する貢献であると考えてきました。

実際、この数十年で小動物臨床は大きく進歩しました。画像診断、麻酔管理、外科、腫瘍治療、救急医療、予防医療、栄養管理、リハビリテーション、行動診療など、かつては限られた施設でしか提供できなかった医療が、今では多くの動物病院で実践されるようになっていきます。飼い主の意識も高まり、犬や猫は「飼うもの」から「家族の一員」へと、その存在価値を大きく変えてきました。

しかし、臨床のレベルを上げることだけが、本当に私たち獣医師に求められていることなのだろうか。私は近年、その問い

を強く意識するようになりました。

もちろん、診療は獣医師の大切な仕事です。病気を治し、痛みを取り除き、命を守ることが、私たちの根幹です。しかし、獣医師の役割はそれだけではないのではないかと。理想の動物病院像を追いかけること、ペット社会の良い点と悪い点を見つめること、この業界に対して自分が何をできるのかを考え続けることもまた、獣医師としての重要な責任ではないかと思うのです。

私たちは、日々の診療の中で、動物と人との関係の変化を肌で感じています。かつてよりも手厚い医療を望む飼い主が増えた一方で、動物を飼うこと自体のハードルは確実に高くなっています。住宅事情、経済的負担、共働き世帯の増加、高齢化、動物愛護意識の高まり、そして社会的モラルの変化。これらはすべて、現代のペット飼育に影響を与えています。

人と動物との接点が失われている

日本の犬の飼育頭数は、長期的に見ると明らかに減少しています。一般社団法人ペットフード協会の全国犬猫飼育実態調査では、2013年の犬の飼育頭数は約87万4千頭でしたが、23年には約68万4千頭まで減少しています。24年調査でも犬の飼育頭数は約67万6千頭とされ、犬の減少傾向は続いています。

一方で、新規に犬を飼い始める頭数は、近年30万〜40万頭台で推移しています。2020年以降はコロナ禍の影響もあり、一時的に新規飼育が増加しましたが、それでも総飼育頭数の減少を大きく反転させるまでには至っていません。ペットフード協会の主要指標では、2024年の犬の新規飼育頭数は44万4千頭とされていますが、長期的には犬を飼う世帯そのものが減ってきている現実があります。

この数字を、単なる市場縮小として見るべきではありません。私は、これは日本社会における「人と動物との接点の減少」として捉えるべきではない

かと考えています。

犬を飼う家庭が減るということは、子どもたちが日常生活の中で動物とふれあう機会が減ることでもあります。かつては家庭に犬がいて、近所にも犬がいて、学校にもウサギやニワトリがいて、子どもたちは自然に動物の体温、におい、動き、老い、病気に触れていました。しかし今、その環境は大きく変わりました。

飼育頭数減少の背景にあるもの

学校飼育動物も減少傾向にあります。文部科学省資料では、学校飼育動物について獣医師会と自治体が連携し、診療・飼育指導・相談などを行う取り組みが紹介されていますが、同時に、学校現場だけで動物飼育を維持することが難しくなっている現実もあります。日本獣医師会も、以前から学校飼育動物の適正飼育や衛生指導における獣医師会の役割を重視してきました。

動物愛護管理法の厳格化も、社会にとって重要な前進です。令和元年の法改正では、第一種動物取扱業者の遵守基準の具体

化、対面による情報提供の徹底、帳簿管理の強化などが盛り込まれました。また、犬猫の販売に関しては、いわゆる8週齢規制など、幼齢動物の福祉に配慮した制度も整えられてきました。

これらは本来、動物福祉の向上にとって必要な変化です。しかし同時に、適正飼養の水準が高まるほど、繁殖・販売・飼育にかかるコストも上がります。生体価格の上昇、飼育用品や医療費の上昇、しつけや予防に対する責任の増大は、動物を迎える側にとって大きな判断材料となります。

つまり、犬の飼育頭数減少には、単純な一つの原因があるわけではありません。少子高齢化、住宅環境、経済的負担、動物愛護管理法の厳格化、社会的モラルの変化、生体価格の上昇、学校飼育動物の減少、子どもたちの動物体験の減少など、複数の要因が重なり合っています。

だからこそ、私たち獣医師はこの問題を「仕方がない時代の流れ」として片付けてはいけないのではないのでしょうか。「無

関心は最大の衰退」と言われます。業界が衰退する時、最も危険なのは、誰かが大きな失敗をすることではなく、多くの人が少しずつ無関心になっていくことです。犬の飼育頭数が減っている。学校から動物がいなくなっている。子どもたちが動物とふれあう機会が減っている。飼いたくても飼えない人が増えている。こうした変化に対して、私たちが何も感じなくなったら、この業界は本当の意味で力を失っていくのだと思います。

診療の先にある社会への貢献

獣医師は、動物が病気になってから出会う存在であるだけではありません。本来、動物と人との関係を社会の中で支える専門職です。動物の健康を守るだけでなく、動物と暮らす喜び、命と向き合う経験、適正飼養の大切に伝える役割があります。

これからの獣医師には、診療室の中だけではなく、地域、学校、行政、企業、教育現場、福祉現場に関わっていく視点が必要になると思います。学校飼育

動物を支援するも、子どもたちに動物との正しい接し方を伝えることも、高齢者と動物の関係を支えることも、ペット飼えない家庭に新しい動物体験を届けることも、すべて獣医師が関わる領域です。

そして今は、テクノロジーも新しい可能性を生んでいます。現実の動物を飼うことが難しい子どもたちに、XRやバーチャル技術を用いて、動物とのふれあいに近い体験を届けることもできるかもしれません。もちろん、バーチャルな体験が本物の命に完全に置き換わるわけではありません。しかし、動物に興味を持つ入口、命について考えるきっかけ、将来本物の動物と向き合うための準備として、新しい技術が役立つ可能性は十分にあります。

大切なのは、過去の形に固執することではありません。かつてのように家庭にも学校にも当たり前に動物がいた時代に戻すことは難しいかもしれません。しかし、今の社会に合った新しい「人と動物の接点」を作ることはできます。その中心に立てるのは、動物を知り、人を知

り、地域を知る獣医師ではないでしょうか。



これからのペット業界を変えられるのは、あなたかもしれません。

私は、理想の動物病院とは、単に高度医療を提供する場所ではないと考えるようになりました。もちろん医療の質は重要です。しかしそれだけでなく、地域の人々が動物との暮らしについて相談できる場所であり、子どもたちが命を学べる場所であり、飼い主が不安を抱えた時に頼れる場所であり、動物と人の未来を考える拠点であるべきだと思います。

ペット業界の未来は、ペットシヨップだけが作るものではありません。フードメーカーだけが作るものでもありません。行政だけが決めるものでもありません。私たち獣医師一人ひとりの姿勢が、この業界の未来を形づくっていきます。

目の前の診療に全力を尽くすことは当然です。しかし、その先にある社会の変化にも目を向けたい。犬の飼育頭数が減っているという事実を、単なる統計としてではなく、社会から動物との接点が少しずつ失われているサインとして受け止めたい。そして、その流れに対して、自分たちに何ができるのかを問い続けたいのです。

獣医師は、ペット社会のフロントラインに立っています。日々、動物と飼い主の最も近くにいる私たちだからこそ、見えることがあります。聞こえる声があります。感じ取れる変化があります。

その気づきを、診療だけで終わらせてはいけないと思います。地域へ、教育へ、行政へ、業界へ、そして次世代へとつなげていくこと。それが、これか

らの獣医師に求められる大きな役割ではないでしょうか。

目の前の動物を診ながら、同時にこの社会全体を見つめることができる獣医師。日々の診療の中で感じた違和感を、問題意識に変え、行動に変えられる獣医師。子どもたちに、地域に、飼い主に、動物と生きる価値を伝え続けられる獣医師。

これからのペット業界を変えられるのは、あなたかもしれません。

そして私自身もまた、その一人でありたいと思っています。

